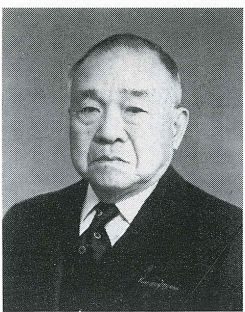


一、金子直吉翁の思い出

石谷金治郎著 「懐古五十年」より



〈その一〉米と金子さん

米は日本民族の主食であり、瑞穂の国と自ら称したわが国農業の主作品である。それで米作の豊凶は国民経済の基本を揺るがし古来幾多の社会的悲劇の因をなした。古くは旱魃水害等の天

災による飢饉の歴史で百姓一揆の暴動の物語が多く残されている。

明治時代に入っても、私等少年のおぼろげな記憶に東北地方が不作で収穫を得られなかった貧農等が、草根木皮を探しとめて露命をつないでいるという話が残っている。その頃は国全体として米が不足で外米を輸入していた。当時「南京米が食えん（九円）のう、千代さん」と唄う俗謡が流行したと大人から教えられた。この南京米というのは支那米でなく恐らくシヤムやビルマ米だったろうが当時その商権が支那人に掌握され、なんきんさんの手で輸入されたから南京米といったものだろう。南京米が一石か一俵か知らぬが九円もしてとても我々貧乏人では食えんとかけた駄じゃれ唄だ。また反対に豊作となると米価が暴落して百姓は現金収入が減り借金の利子も払えず難渋する。

第一次世界大戦中には米の不足で所謂米騒動が起こった。米の買占め及び輸出による米穀欠乏が起こったので、その張本人は鈴木商店だ

たが、もつての外だ。元来現行の地租は明治の初年に制定されたもので、旧幕時代の物納年貢米の三公七民とか四公六民とかいう制度を基にし、当時の米価から逆算して台帳地価を定め、その地価の何パーセントと定めたものが、地租率でその後米価は何十倍かにあがっているが、台帳の地価はそのまま据置かれて、現在では只みたいなようなものになり、従って地租もお話にならぬ軽微なもので、日本のように二町歩やそこのチッポケな田畑の持主が地主顔して左うちわで遊んで食っている国は世界中どこにもない。勤労の美風を害なう現在の地租は引上げこそせよ下げるとはもつてのほかだといってやった、と。

またある日、さよう吉植庄一郎当時政友会の中堅代議士で農政通を以って任じ自ら千葉で開墾水田を大規模に経営していたやかましい政治家がやって来て頻りに米穀専門論を吹聴して行ったが、私は専門は米価問題の解決にはならぬこと、私は米価本位が吾国の経済を安定させる根本的政策だといってやった。日本は神代から瑞穂の国といわれる米作を基本とした農業国で、米は国産の大宗で且国民の主食であり、国民の消費生活からいっても生産収入からいっても、経済を左右する最大原因であるから、これを貨幣本位制に結びつけるのが、一番の要諦であるといわれた。

私はこれに対しわが国民生活が米に大部分依存した時代には全く適切な方法だったかも知れぬが、今は国民の生活程度や経済状態も進歩し米以外の多くの物資を消費し生産し輸入し生活しているのだから、米は勿論重要であるが、それ以外の要素を無視した米価本位の幣制ではうまく行かないのではないですかとままいきなことを申ししたことを憶えている。

金子さんは勿論経済学、財政学、金融理論を学校で学ばれたことは

と煽動された暴民が神戸の本社を焼うちした。私も大正七年入社早々と外国電信をやらされて、少しは米の輸出に関係した。米の輸出は確かに多くの引合があったが当時の供給と船腹の不足では大した輸出ができる筈はない。恐らく戦時好景気による消費の急増と、戦時需要による食糧品価格の世界的暴騰と船腹不足運賃暴騰によって輸入手が巧く行かなかった事が当時米穀不足の原因であったと思う。

戦争が済んだ後私は日本へ帰って東京支店に転勤したが、支店は専らローカルな取引に限られていて、輸出入その他大筋の仕事は総べて神戸の本店でやっていた。金子さんは大きな金融や政治的接渉をするため、しょつちゅう東海道線の寝台列車で東京と神戸を往復されたが、東京ではステーションホテルの二十号室を年中借切りで在京中の旅宿兼事務所として使用され、支店へ顔を出されることは極く稀であった。東京で種々工作した結果ロンドンや紐育の支店へ至急の指図や照会の電信を出される場合私は呼び出されて金子さんの口述を英文電信に作文させられた。夜でも昼でもおかまいなしの呼び出しには少々閉口した。呼び出されて二十号室に待機している間に、政治家、企業家、銀行家等あらゆる種類の名士の出入りが多いのを目撃した。彼等を送り出した後電信を作る間、或いは来客の絶えた暇を見て食堂にお伴した寸時に、来客の齎した話題に対する意見や感想をもらされることがあったが、なかなかの卓見や奇想がうかがえた。第一次大戦後反動不景気が起り、物価が暴落した上に米の豊作と来て、米価も暴落し深刻な社会情勢となって大隈内閣も手の下しようがなかった。金子さんの所へも色々な人物が現われて対策を持込んで批判や賛成を求めた。金子さんはある日私に話された。

農民の窮状を救うために地租を軽減してやるべしだといった人があつ

ない。それなのにこの地租や米価本位論が湧いて出る所を見ると、余程鋭い天才的な頭脳の持主だったと驚かれる。

その後何年か経て、満州国の建設時代に日本で米に困ったと同様に大豆の市場を如何にして安定させるかに苦心した。満州国政府で金子さんの意見が聴きたいと招聘があつて満州へ炎天の七、八月にこられた。私は当時日商の満州支配人をしていたので、大連から奉天、新京、ハルビン、吉林までもお伴して歩いた。

新京で要人から中食によばれて、中央銀行クラブに行く時、これも満州国政府の顧問として来ていた河合良成氏に会った。河合さんは米騒動焼打の頃、農商務省の役人で食糧の管理配分に携わっていたそうで、あの頃あなたの方に米を担当していた何とかという人がいましたねと聞かれた。それは永井幸太郎ですと金子さんが答えると、そうそうと河合氏も思い出した。河合さんは、あの時米穀倉庫で配分業務の仕事をやっていたが、米の不足が目立って来て各地で不穏の氣勢が熾烈になってきたが、米の入荷がとても間に合わない。然し人心を安定させねば益々取付騒ぎが大きくなると見て、倉が空っぽになつていても構わず空手形の配給券をどしどし発給した。

河合氏が後年商売で活躍される才の片鱗がうかがわれる。その巧劣を認められて勲何等かの勲章を戴いたとの話。金子さんは河合氏に、あなたは役人をしていて勲章を貰ったが、私共鈴木商店では当時早くも米穀危機を予知して政府に外米の輸入手当をすすめ買収させたが、船積が間にあわず急場に役立たぬので自己手持の早積を振替えて政府に渡し配給を助け、一方日本人の嗜好に適し、且つ輸送上手近にある朝鮮米を買集めて日本へ早く送り、この代替としてシヤム、ビルマ等の輸入米を廻す手を打つ等相当な奉仕をしたんだが、俺の方は丸焼け

にせられて蔭の貢献については何の沙汰もなく悪者に成ってしまった。全く引合わん話だと大笑いされた。

その後、米は栽培技術の進化と植付反別の増加でほぼ自給の可能な状態にまで進んだが、これ以上人口の上昇に追いついて増収できるか、労働構成、価格形成から見て限度にきているのではないのか、食管会計の処理も重大な問題で今尚米については未解決の要素が沢山残っている。

（その二） サクラビールと金子さん

私が鈴木商店で働き始めたのがたしか大正六年三月末第一次大戦のピークが過ぎたと思われる頃、六月始めには西川支配人（現西川社長 の岳父）から、君は戦争が済んだら直ちにハムブルグへ行つて貰いたい。未だ這入れぬからそれまで紐育に行つて北浜君（元日商神戸支店 担当重役）の許で手伝いながら待機するようにとのお指図。早速船室の手配を頼んだが十月末まで余席がない。それ迄鈴木商店経営の工場を見学せよとの達示、関係工場の団地（その時はこんな語はなかった） 関門へ先ず行くことになった。

下関は西岡という西部探題がいる支店、海峡の彦島に亜鉛精錬所、九州側に渡つて巖流島（宮本武蔵仕合の島）を前にした海岸沿いに銅精錬所（現神鋼伸銅工場）再製塩工場、精米工場、製粉工場（現日粉工場）焼酎工場（大日本酒類KK、後に合併相継ぎ現宝酒造の一工場？）大里製糖工場（当時既に大日本製糖に譲渡）とサクラビール工場と最高立地を独占して関門を制圧していた。私はこれらを次々と訪ねて廻つた。焼酎工場に黒田さんという学校の大先輩のマネージャーがいて工場を見せて下さつた上、アルコールで縁のあるサクラビールへ案内してやるというてビールの講義が始まつた。

金時代、その花形の鈴木商店、而も関門は其の縄張り、春帆楼（伊藤博文公が日清講和談判で清国から二億八千万テールの償金をせしめた場所——この金が日本の金本位最初の準備金となつた）や大吉と一流の料亭で派手な宴会が続けられたが、客を迎える女中仲居はサクラビールの模様の別染そろいの手拭や前掛の出で立ち、席に出すものはサクラビールばかり、アサヒ、キリン等は一切排除、処が宴果てお客や主人側のえらい人が帰つた跡、接待に疲れた若い社員がヤレヤレこれから吾等の二次会と屈託ない場面になると、女中達に酒持つて来いビール持つて来いと遠慮会釈なく、サクラビールを持つて来るとソナナまらずいビール呑めるか、キリンを持つて来いとか、俺はアサヒだとかでんで勝手放題、といった裏裏話もあつた。

それはさておきビールの起源の馬しう説をコンファームすべく文献を漁つて見た。曰く「ビアとは発芽した穀物のアルコール醗酵により醸成した飲料にして普通大麦々芽に他の澱粉質を加味または加味せずホップを加えたるもの。その起源は遙かなる古代に遡る。現存最古の物で西暦前六千年以前と推せられる粘土器に神に献げる素朴なビールを作っている情景が刻まれている。パピロンのビールは西暦前四千年迄に十六種の異なつたタイプができその醸造は当時重要な産業であつた。それは大麦で作られ蜂蜜を混ぜていた。ホップに類する苦味植物が加えられたのは西暦前三千年に降つてからのことである。西暦前三千年エジプトのファラオ帝王の代にはビールは一般に慣用せられ常食の重要部分をなしていた。農夫や労働者は毎日の労賃として国王からパン四個とビールをジョッキ一二杯下賜された。学校へ行つて息子達に毎日ビールを届けてやるのが当時の母達の行事であつた」と。そんな古い昔に平民の子供が多く学校に行つていたというのはどんな

そもそもビールの起源といえは何千年か昔に遡る。その昔パピロン奴隷が穀倉で麦の運搬に使役されていた。暑い所で裸で重労働、のどがかわいて仕様がなない。たまたま倉の間の露路に雨水のたまりがあつて、麦の粒がこぼれて浮かんでいる。生温かくて赤黒く濁っている。駄馬のたれた尿も流れ込んでいたろう。それでもかわき切つた奴隷が耐らなくなつてこの水を手にくくつて飲んだ。ところが顔がほてつて、ふらふらとして浮足立つて歌い踊り出した。その内に他の奴隷もこれに習つて同じ狂態を演じそれが皆に伝わつた。これを見て不思議がつた役人がマサカ馬シヨウ水も飲めなかつたが、大麦を水に入れて醗酵させて飲んだが酔が廻つて愉快になつた。これがビールの発端だが、この初期のビールは直ぐ腐るのでこれにホップを加えて防腐したその苦味が遂にビールに不可欠の持味となつたのさ。面白く拝聴してサクラビールに案内して頂いた。

サクラビールでは住田専務とお名前を忘れたが技師長が迎えて下さつて早速ご自慢のビールを何本も栓をぬいて勧められた。学校出たばかり息子のような私等を下にも置かぬ歓待、流石は人気商売の客もてなし（当時は紐育の検舞台に行く吾等有望青年に対し敬意を払われたとうぬばれていた）、技師長は当社のビールは甘くて婦人向だ（ビールを飲む女は当時殆んどいなかった）とくさす人があるが、とんでもない。わが社は独乙最高の技術を取入れ本場のビールに劣らぬものを作っている。今世間でうけている日本のビールに真似ることはなんでもない。醸造の際用いる（コゴメ）の分量を少し多くするとビールが清澄になりアルコール度が上つてピンとくる。それにホップの量をふやすと苦味が増す。しかしこれはビールの本質を知らぬ人達の望むことで吾々技術者の良心が左様な追隨を許さぬと、当時は最もはなやかな成もんだらう。

しかし近代では欧州やアメリカで百姓が野良仕事の昼休みに黒パン齧つて手製のビールを飲んだことは珍しくない。

Jack Londonの小説「John Barleycorn」という小冊子があつた。たしか一九一八—一九一九年頃在米中読んで大面白かつたことを憶えている。それは禁酒法実施当時書かれたので酒飲みの様々ありさまを描いている。主人公の幼時の思い出の中に三、四歳頃父親が畑に出て働いているところへビールを持って行くと母にいつけられて重いジョッキを持つてこぼさぬように用心し乍らよたと畔径をたどつて行くうち、ちよつと指先をつけてなめて見たりしたがのどが渴いて耐らなくなり、つい口をあてて一口二口呑んだがふらふらして来て土の上にお臥せいつの間にか睡込んでしまった。やがて父や母はびっくりして探しに出たが畔に赤い顔をして睡っていた彼を見つけてホツとして連れ帰つた。

サクラビールの会社は金子さんの発意で立てられその支援で続けられたものだが其の後、年経て私がアメリカから帰つて東京に勤務した頃、丁度前回に述べた米と金子さんの話と同じ時、金子さんが私に話された。「今日或る人が来て、ビール専売論を一席弁じて帰つたが僕はビールは専売の対象としては全く不適当だと思つた。ビール専売の目的は供給や消費の規制であり得ない。専ら収入目当てでなければならぬ。ところがビールは民営会社が競争して宣伝広告し、これでも飲まぬかといわんばかり口許まで突付けて飲ませるから消費が殖える。政府の事業となればそんな真似できぬから収入を揚げる訳に行かぬと教えてやつた」と。

その後鈴木商店が解体しサクラビールも人手に渡り間もなく後続継

かず消え去ったが、金子さんも仕事を失って隠居のような静かな生活に入られ、私も日商が成立する前、鈴木商店の砂糖部の仕事の跡始末をやっている、金子さんと会う機会が多くなった。ある日金子さんはサクラビールも盛んな時分には大日本ビールの邪魔になったと見え、手を廻して買収に来た。相当な金を出す話だったが俺は馬越恭平にいと泡吹かしてやろうと意地になって挑戦を続けたがこつちがとうとう倒れて了った。よい加減な時肩代りすれば大金が手に入っていたんだなあ。競争も相手の力を測って程々にせにゃならんかったのう。丁度ブラナモンドと戦ったマガジ天然ソーダ灰の太陽ソーダも同じ失敗をやったなあ。あは……と大笑された。

(Nissho Life Sep. 1964)

二、治外法権下の金子さん

西暦一八五七年（安政四年）江戸幕府が欧米の数国と修好通商条約を結んで以来一八九九年（明治三十二年）新条約が発効するまで、実に四十二年間、治外法権を強いられた関税の自主権を奪われていたのである。その間、横浜、神戸等開港地には永代借地権による居留地が設定され、その限りにおいては法的にも地域的にも、これらの条約国が実質上その領土を日本国内に延長占拠したもので、領事館が警察を備え領事が裁判権を行使し、日本の法律や警察権はその区域には無力であった。更にその間一時とはいえイギリスとフランスが横浜に駐屯兵をおいたことには至っては全く敗戦国と変わらぬ屈辱を蒙ったもんだ。この間のできごとで明治何年頃のことか、ご本人から確かに承ったんだ

にビールを飲んでしていると注進してきた。

それッと洋妾に半衿か何かを買って持たせて一寸座から呼出して、コレコレだから室の鍵を貸してくれと耳打ちさせた。心得たとばかりに洋妾はだんなの膝に乗ってそのかいなを抱え甘ったれ掛りその間に男のポケットからキーリングを吊出して貸してくれた。こうして金子さんは監禁から救出された。

その頃商館取引の条件は、向うさまませのだからしなさ、商館側で勘定を支払うというまで、まだかまだかと時折催促するほか何とも仕様がなかったそうで、当時緑茶の輸出が盛んであったが、茶を渡してからその荷物がシカゴまで送られそこで売捌かれた上、予定通りに売られたら約束の代価を払ってくれるが、損でもしようものなら品質に苦情をつけて独り極めて何割でも天引きして残額を払ってくれる。何か月も引延ばされた上この始末、さりとて何とも対抗する方法もなく、商館廻りの売子は出入りの日本人の溜り場で商談の返事を、また勘定の支払を待つ間、仲間で将棋を打ったり、屋台店やかつぎの物売からキツネズシや大福餅を買って食いながら、半日、一日を過したという、こんな風に商館廻りを続けているうち、金子さんはある商館で外人社員が知らぬ間に減って店内が物淋しくなったのに気付いた。マネージャーの室にはそれとよく似た人と二人きりで沢山の帳簿を積んで計算に余念がない。そのうちマネージャーが独りで室で計算しているようになつた。ここで金子さんの頭には、これは変だ只事でないとピンと感じた。日本人の使用人に聞いたら、マネージャーは先月国に引揚げたという。いや先頃までのあの室に二人仕事をしていたが今はマネージャー一人残っているじゃないか。いや彼は弟で、会社が破産したのでマネージャーは国へ帰り弟が残務整理だと。金子さんもこれには驚

が忘れてしまった。いずれにしても金子さんの二十歳代のことには違いない。

その頃鈴木商店には既に英文コレスボンデンスの先生がいたというから、アメリカやイギリスと直接取引を幾分やっていたと思える。しかし樟脳や薄荷等の輸出品の大部分は居留地の外国商館に売込んでいたものとみえる。

金子さんがこのような売子となって商館廻りをしておられたある日、樟脳だっと思うがある値でオフアしたところ、商館のマネージャー（米人だったか独乙人だったか覚えぬ）はそれは高い、うんとまけろという。金子さんは、まからぬといいはった。いやコレコレの値にまける、いや到底そんな安くはならない、いやその値にかかる筈だ。押問答の末マネージャーはお前の主人に話したら必ず承認する、頑固なことをいわず今すぐにイエスといえという。金子さんはまからぬと突張った。マネージャーは怒ってそんならお前はここでじっくり考えたらよからう、と座を立ちドアをロックして立ち去った。

鈴木のお店では、ご主人始め、支配人等が寄って、もう夕方というのに金子が帰ってこぬ。彼は実直な男で決して道草を食ったり他所へ遊び廻るようなことはない。一体どうしたものだろうと大騒ぎをしていると、同じ仲間の商館廻りの若者が、金子はんならたしか何番館にいたというので、すぐにその商館へ探しに人を出した。既に閉館時間過ぎて閉まって誰もおらぬ。あちこちと室をのぞいて廻ったら、ある室に金子さんが独りピヨコンとしている。ドアは固くロックされて動かない。さあ困ったことになった。早く金子を救い出さねばならんがと評定、挙句、誰かがマネージャーのだんなは、今商館の裏の住宅へ帰ってラシャメン（洋妾——日本人の女が外人の妾になっている者）相手

いた。うちはここへ相当な金高の樟脳を売渡して未だ金をもらつたらん、これは困ったことになった。うちの渡した樟脳はどうなったか、既に船積したかこの男に尋ね、いや未だ積出してない、何番の倉庫に入っているが、それは香上銀行（Hongkong Shanghai Bank）の担保になってその倉庫は英国領事によって封印されていると。

金子さんは店へ飛んで帰って一案を秘めて、執達吏の事務所へ駆け込み、事情を話して、樟脳は代金を貰ってないからこつちのものだ。これをこつちで差押えたいから、お前さん、わしと一緒に来て差押えの封印をしてくれんか、倉庫は、わしが掛掛屋（いかけや）を連れて行って錠前を切つてあけるから、と頼んだ。これを聞いて驚いたのは当の執達吏。金子はん、なんぼなんでも、英国領事のシール（封印）を切取るとは居留地の司法権を侵害し大英帝国を侮辱するものとして国際問題になるぞ、そんな大それたことはやれんなあと。そこで金子さんは、心配せんでもええ、倉庫を開けるのはわしや、お前さんは、開いた倉へ入って商品を封印するだけやさかい、おこられへん。わしも錠前を外すのにイギリスのコンサルのシールは切らへん、そこをよけて南京錠の鉄の柄の所をやすりで切るさかい英国の紋所を傷つけることあらへん。責任はわしが持つさかいやつてくれと頼んだ。この執達吏先生よほど肝の太い男とみえて、倉庫までついて来ていった通りに樟脳の樽に封印してくれた、と金子さんも感心して話された。

そんなことをやっている間、領事館の騎馬巡査が廻って来て見届け帰った。そうこうするうちにこのことが日本人間に知れ渡って、キツネズシ大福餅連中が騒ぎ出して、われもわれもと居留地の商館倉庫に押し寄せ、領事館側では騎馬巡査を出動させて鎮圧する大騒動となったが、結局、大福餅組は何物をも押え得なかった。

金子直吉の鉱山業への野望

須藤 欽 吾

間もなく香上銀行のマネージャーから金子さんに呼出しがかかった。さあ大変、店のコレスポンデンスの先生に上田という英語の巧い人がいたので通訳に出てくれといったら、恐れてそんなところへよう行かんと逃げ、金子さんは、お前さんは通訳するだけで何でもない、おこられるのはわしやとなだめて行ってもらった。銀行ではその担保権を侵害したとひどく小言をいった揚句、この事件は近々香港から廻ってくる総領事が審理されるだろう。この人は日本でいうなら森有礼(当時最進歩的な有力議会議政治家で文部大臣になり暗殺された人)のような偉い人だと聞かされて無事引退った。

この事件は神戸開港史上の著名なできごととして記録に残っていると金子さんから当時聞かされたが、年月も忘れ今はこれを探ねる手裏もない。世は移って開港百年目には盛んな祭典が行なわれ、米国へは吉田茂氏を長として財界の名士をもうらした使節団が派遣され、各地で賑やかなレセプションが催された。筆者も当時紐育にいて、ピエール・ホテルで催された日米協会主催のバンケットに数名の米人知己を招いて参加した。

この開国修好条約を結ぶためには攘夷派も開国派も多くの血を流し貴い生命を失った。最近まで連続テレビショウ「花の生涯」が興味の的となっていたが、この大きな犠牲を払い国をゆるがせて得た条約は何物であったか、金子さんと同じようなエピソードを探せば数限りなくあることだろう。

使節団の催はこの歴史的事実を記念するためか、外国に感謝するためだったか、治外法権下居留地にとんなことが行なわれてきたかを知つてのことか……。

(Nissho Life Nov. 1964)

を受け継ぎ、浅田長平を起用せんとしたようだ。同時に六口島も計画といったように、設備の革新とともに、瀬戸内沿岸各地の銅鉱石等を手当たり次第買鉱と存立を図つたが、現在はタンングステンの瀬戸田、モリブデンの大東が太陽鉱工に残っているのみのようだ。

鈴木商店没落の原因は、台湾銀行の新規貸出し中止にありと、金子直吉は片岡蔵相(土佐人・関西財界の重鎮)に泣きついたが「立场上銀行に対して貸出しの指図は出来ない。況や誰に貸してやれなどと命令出来るものではない」とことわられている。片岡はまた、恐慌の遠因として、日本の不自然の好景気に我が国の朝野は放漫な施設をした上、大戦後計画の整理、収縮を図る可きであつたと苦言を述べている。金子も大戦終了を後藤新平の私語らより察し、退却を考えたようだが、社内の統制力を失っていたため、徹底出来なかつた。勿も当時鈴木商店内は、学卒派、土佐派と分かれていたが、何れも優秀な人材が群雄割拠の状態で、金子自身の人を大切にすることを仇になつたようだ。生産が人間の一番楽しい仕事であるとの彼の信念はずつと変わらず、お蔭で事業と人とは残つた。今日の瀬戸内工業地帯隆盛が起つたことは「関門と阪神の海岸を鈴木マークで埋める」との彼の夢の変形とも考えられよう。

然し彼の鉱山業への野望の一端は「商売の基礎は工業にあり」と、現在の太陽鉱工や東邦金属等に脈々として伝えられていることを忘れてはなるまい。

本文起草の切っ掛けは、日本学術振興会第六九委員会「非鉄金属製錬技術の伝承の調査研究成果報告書」(平成十七年三月)によるもので、本書を御恵送下さつた東大増子、阪大幸塚、千葉工大山下の諸先生のご好意に感謝します。



尚亜鉛の学術的研究と戦後の工業隆盛に貢献された東大小川芳樹先生(日本で最初にノーベル賞を受賞された湯川秀樹先生の長兄)は、筆者東北大学在職中(第二次大戦前後)格別の御指導をいただいただけに、この業界の沿革を辿ることは感無量なものがあります。

三菱の佐渡金山、生野銀山、尾去沢銅山、住友の別子銅山、三井の神岡鉱山といった鉱山業が旧財閥発展の基盤とするに至る電機工業への本格的関心と進歩の機会を与えた。この鉱山業(非鉄金属製錬を含む)を欠いたのが、鈴木倒産の一因だとする者もいるようだ。

抑々金子直吉は非鉄金属製錬にも夙に関心を持ち、大正元年吉原重威を欧米に派遣し、亜鉛について調査をし、同年四月門司に大里製錬所を建設、エイ銭の蒸留を始め、日本金属を創立し、彦島製錬所として発足した。他方徳山に焙焼炉を建設して焼鉱を彦島に送り始めた。次いで彦島に蒸留工場を増設して彦島を亜鉛蒸留大工場にしたが、第一次大戦休戦の余波で全面休業とした。にも拘らず亜鉛への魅力は失えず、大正十一年には彦島に新式レトルト炉を新設。十三年まで増設を続けた。然し昭和三年遂に彦島を三井に渡すこととなった。

このような鉱山業―殊に亜鉛―への関心の深さは、有名な天下三分の書の中にも次のように記されている。

「銅、亜鉛等の製錬事業を開始したるに甚だ好結果也。即ち銅は支那の古銭その他古金類を分解、亜鉛と銅を得るにあり、亜鉛と鉛はロシア、豪州より鉱石を取寄せ、之を製錬しつつあり。

この事業に対しても有益な報告と知識を与えられんことを望む」

亜鉛の他にも銅に手を出し、大正四年杉山氏より日比製錬所の経営